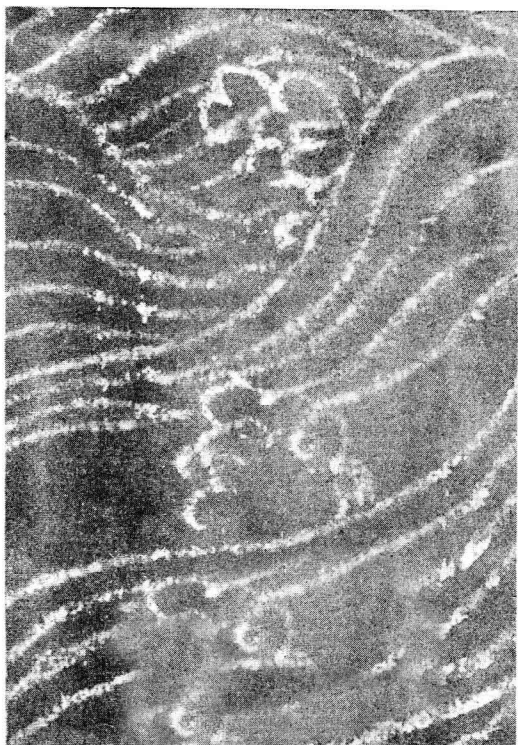


風の巻

獅子文六

新潮社版



大 番

風 の 巻

昭和三十二年六月二十五日 發行
昭和三十二年七月 五日 二刷

定価二八〇円
地方
売価 二九〇円

著 者 獅 子 文 六

発行者 佐 藤 亮 一

東京都新宿区矢來町七十一

発行所 株式 新 潮 社

東京都新宿区矢來町七十一
電話 (34) 七一 一一八
振替 東京 八〇八番

乱丁本は本社又はお買求めの
書店でとりかえます。

目

次

青海苔

山上御殿

女神誕生

女縁金縁

二十五歳

大将と女将

明け易し

音ばかり

虫がいい

山を望む

提灯火事

雪の日

最後に笑う者

一五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 一七

コ	マ	
金づかいの道	二二	
小花ねえさん	二三	
鶴一対	二四	
甲から丙へ	二五	
落城	二六	
花のや	二七	
人事不測	二八	
株と自殺者	二九	
帰りなむ、いざ	三〇	
覆水盆にかえらず	三一	
新曆	三二	
イリコと共に	三三	

都会の呼声

海を渡る

抜け荷仲間

多忙後朝

大阪の宿

陣太鼓

三三

三〇

三六

二七

三五

二五

装幀・挿絵 宮本三郎



大

番

風
の
巻

青^{あお}海^の苔^り

一

旧曆の正月を、故郷で迎えて間もなく、丑^{うし}之助^{のすけ}は、東京へ帰る時期がきたのを、知った。
新どんから、待望の手紙がきたのである。

丑^{うし}之助^{のすけ}が、一番大きな債務を残した、山加^{やまが}という店が、この頃^{ごろ}、少し景気を持ち直したそうで、主人に会ったら、ギュー公どうしてると、新どんに、笑いを洩^もらしたそうで、一時と、よほど空気が変わったから、そろそろ、舞^まい戻^もつてもいいだろうと、いうことだった。

——やつと、帰参^{かへま}が、叶^{かな}うのかいな。
丑^{うし}之助^{のすけ}は、ホッと、息をついた。

もう、田舎が退屈で、何とも、やりきれなくなっていたのである。買いかぶりの厚遇^{こうぐ}も、長くなつてくると、鼻につき、反対に、東京の空が、恋しくなる一方で、我慢^{がまん}の糸も、切れかかっていた矢先きだったのである。

本籍は、村にあつても、彼は、もう、東京人の一人になりきつてることが、今度、ハッキリと、思ひ知らされた。

彼は、足もとに鳥が立つように、帰り支度を始めた。両親も、彼が帰郷していると、何かと費用が掛

るので、出発を引き留めもしなかった。

「また、脚氣にでも罹^{かか}ったら、戻れや……」

「いや、もう、脚氣は、ご免^{めん}や」

七カ月余の滞在で、方々に、義理もできたから、暇乞^{いとまご}いの挨拶^{あいさつ}に回ったが、最後に、森家の玄関に立つことを、忘れなかった。

「おう、いよいよ、ご出立かいな……」

主人自から、肥^ふった体を、奥から、現わした。

「へい、長々、ご厄介^{やぐわい}になりましたが……」

「羨^{うらや}ましいことや。わしも、多少し若^{わか}かったら、あんたと同道して、東京へ遊びに行くがのう……」

と、主人は、いかにも、東京憧憬^{とうきょうけい}家らしい口吻^{こうふん}を、洩^はらした。ふと、思いついたように、

「あんた、えらい済^すまんが、頼^{たの}みごとがあるのや。可奈子が、郷里^{あつり}の青海苔^{あおのり}が好きやで、ちょうど、季節やけん、あれの家へ届^{とど}けてやんなせや。小包で送ると、味が変わるけん……」

この地方で採^とれる青海苔は、日本で最も優秀とされ、寒中^{かんちゅう}には、海沿いの家々の軒に、春がきたかのように、新鮮な緑の原草が、掛け列^{かけり}ねられるのである。こればかりは、東京にもない美味だといちて、可奈子は、毎年、実家から送らせるのだそうである。

「へい、おやすいご用で……」

丑之助の答は、ゴム・マリのように、弾^{はじ}んだ。

森家へ晩餐^{ばんさん}に招かれた時に、主人は、娘の家へ遊びに行けと、いつてくれたが、それを実行したところで、彼女が対^{あいて}手^てにしてくれそうもないのは、わかっていた。しかし、今度は違うのである。父親からの頼まれ物を、届けに行ったら、まさか、玄関払いも、食わさないのであろう。

——何と、今度の東京行きは、嬉しいことかいの。

彼は、勇んで、スーツ・ケースを提げ、バスの停留所へ、急いだ。

驚いたことに、村の助役や、小学校校長も、見送りにきていた。森家の第二番頭も、加わっていた。それに、民吉や、長十郎を入れると、見送人は、なかなか、賑かだった。いつか、彼も、村の名士になつた証拠だった。尤も、二月の寒空に、帰つてきた時のままの合着のセビロで、オーバーも着ていないのは、名士らしくないが、暖地に住み慣れている人々には、それも、目立たないらしかった。

「では、そのうち、また、戻つて参りますけん……」

バスに乗る時、彼は、そう挨拶したが、胸中では、帰郷するのは、ロクな原因ではないから、真ッ平だと思つていた。

姫之宮へ着くと、彼は、東京への土産物を、数々、買い調えたが、序に、梅香の許に一泊して、名残りを惜しむことも、忘れなかつた。

二

東京駅へ着くと、丑之助は、すぐ、春駒へ乗り込んだ。白昼から、遊蕩心を起したわけではなく、他に、行先きがなかったからに過ぎない。

「まア、あんた、帰つてきたの！」

おまきさんの歓喜は、いうまでもなく、薄暗い二階座敷の戸を、ガラガラ明けて、昼遊びの客のあつたのを、近所に広告してしまつた。

「ちようど、いいところ——オカミさんが、ちよつと、田舎へ帰つて、あたしの家みたいなのだよ……」

「そうか。そやったら、二、三日、泊っても、かんまんか」

「何日だって、かまやしないわよ。オカミさんが、帰ってきたら、その日から、お勘定払えば、いいじゃないの」

なるほど、そういう便法があつた。待つべきものは、待合の姐さんの情婦である。

それから、酒になつて、例の如き鳥鍋になつた。

「あんだ、田舎へ帰つて、何だか、男ッ振りが、よくなつたよ」

おまきさんは、ホロ酔いになつた眼で、シゲシゲと、男の顔を眺めた。

「マズいものばかり、食わされたけん、ちいたア、痩せよつたかも知れん」

「それでも、よく、辛抱したわね。半年の余も、引ッ込んでいたんだもの……。きつと、これから、

運が開けるよ。あたしも、帝釈さまへ、お願いしといたからね」

「帝釈さまは、いけんわい。この前、スカ食わせよつたやないか」

「勿体ないこと、いうもんじゃないわよ。あの時は、あたしが、悪かつたのよ。塩断ちしときながら、

一度、タクワン食べちやつたからね」

おまきさんは、箸で、鳥鍋の煮えたところを、丑之助の方へ、搔き寄せながら、相変らずの健啖振

りが、懐かしそうだった。

「ギューちゃん、嬉しいよ、あたしア……」

彼女は、丑之助の膝に手をかけて、体を傾めにした。

「わしかで、嬉しいわい」

と、いったまま、彼の言葉に、情熱が伴わなかつた。

おまきさんが、嫌いになつたのでない。彼の胸に、託された青海苔を持って、目黒の邸を訪ねる幻

影^えが、眼にチラついて、他のことの興味を、割^きくのである。

おまきさんは、早くも、男の態度に、不審なもののあるのに、気づいた。

「あんた……」

「なんや」

「田舎で、浮気したろう！」

鋭い、一言だった。

「したわい……」

丑之助は、頭をかいてみせた。

「金持ちの娘とかが、田舎へ帰っていたんだね」

「そら、ちがう。姫之宮の芸妓^{げいこ}や」

芸妓と聞いて、おまきさんが安堵^{あんど}するのは、奇妙だった。

「どうせ七カ月も、お精進^{しやうじん}のできる、あんたじゃないからね……どんな妓^こ？」

「梅香ちゆうてな。年は、十八や。色が白うて、声が可愛ゆうて、体が、ポチャ・ポチャしよつて……」

「もういいよ。どうせ、あたしは、色が黒いよ……」

「あ、痛た。ま、こらえてやんなせ……」

丑之助は、膝^{ひざ}をさすって、いい気持そうだった。

三

春駒に、三日間、泊ってるうちに、丑之助は、新どんを呼び出したり、木谷さんの自宅へ、土産物

を持っていたり、まず、東京の偵察ていさつを始めた。決して、すぐには、カブト町へ、姿を現わさなかつた。

それから、おまきさんと相談して、新宿御苑しんじゅくごえんに近いアパートの一室に、とりあえず、ネグラを定めることにした。そのうちには、一軒の家を借りて、板橋の在へ歸っている、おまきさんの母親を、呼び寄せることになっていた。

洗心莊せんしんそうというそのアパートへ、入るにも、寝具や、火鉢ひばちなど、皆、おまきさんが、世帯を持っていた時の品を、回してくれた。それでも、彼女は、氣の毒ひげろそうに、

「ほんとに、朝ご飯から、大衆食堂へ出かけるなんて、可哀こあいそうな人だよ。長いことじゃないから、辛抱してね……」

しかし、丑之助自身は、そんなことは、一向、苦にならなかつた。一年前のゼイタクな暮らしは、何の習慣も残さず、大衆食堂の飯や味噌汁みそしるも、食えばウマかつた。境遇に対する順応性は、ゴムのようじゅうなんに、柔軟な男おとこだつた。

そして、いよいよ、明日からはカブト町へ通おうという日に、彼は、可奈子の住む家を、訪ねることにした。

三月になつたばかりの寒い日だつたが、彼は、まだ、オーパーを買う金がないから、合セビロ一枚の姿で、新宿から、山の手線に乗つた。

おまきさんから、きれいなフロシキを借りて、青海苔の紙包みと、彼自身の手土産として、姫之宮の唐饅頭どうまんじゅうの箱を包み、目黒駅で降りて、交番で、有島伯爵邸を聞くと、すぐ、道はわかつたが、エビス駅寄りの高台で、かなりの道を、歩かねばならなかつた。

道のりのあるのが、かえつて、よかつた。この訪問に、あれほど期待を懐いだいていた癖くせに、いざとな

つたら、もの怖^{おそ}じが出てきたのである。

——わしは、何というて、挨拶したら、ええのや。

可奈子が、出てきた時に、果たして、うまく、口がきけるか、どうか。

歌舞伎座で、彼女に会わなかったら、彼は、もっと、勇敢^{ゆうかん}になれたろう。彼女に会っても、あの美しい眼の一瞥^{いちべつ}を、浴びなかつたら、こんなに、ビクビクしなかつたろう。

あのときの衝撃^{しょうき}を思い出すと、彼は、いつそ、このまま回れ右をして、青海苔^{あおのぼろ}だけ、小包で送ろうかという氣持に、なってくるのである。

だいぶ、歩いたところで、彼は、道行く女に、もう一度、道を聞いた。

「坂の上に、門が見えるでしょう。あのお邸^{やしき}ですよ」

彼は、ドキンとした。もう、その家の前へ、きていたのである。

ゆるい勾配^{こうはい}の坂は、有島邸の専用道路らしく、そのつきあたりに、西洋風の低い石門があった。門の中は、松らしい樹木が、コンモリ茂って、どこに家があるのか、わからなかった。

——さすが、華族さんは、ちがうわい。

森家の構えなぞ、段ちがいの規模と、氣品だった。門に近づいても、標札^{ひょうさ}なぞは、出ていなかった。

しかし、門前へくると、彼の度胸が据^すわった。彼女の体につけた香水の匂^{にお}いが、その辺に、漂^{ただよ}つてするような氣がしてきた。あの時の恐怖^{こふ}よりも、陶醉^{とうずい}の方が、彼の心にかえってきた。

門は、堅く閉^とざされていたが、脇の通用口の扉^{とびら}は、難なく開いた。入ってみると、長い、玉砂利の道で、明治風の洋館の屋根が、ヒマラヤ杉^{おのお}に掩^{おほ}われて、少しばかり見えた。洋館の前へ出たが、玄関は閉^とざされていたので、御殿風の日本家屋の内玄関に、やっと、呼鈴^{よびりん}のポツチを見出した。

最初出てきたのは、袴はかまをはいた書生だった。

「殿様に、ご面会ですか」

と、聞かれて、彼は、マゴついた。

「いえ、その、鶴丸町から、お嫁入りになった奥様に、お国から、届けものを頼まれてきましたけん……」

「はア、若奥様に、ご用なのですか。それなら、友房様のお邸の方に……」

と、書生は、左手の別棟むねの方を、指さしたが、それでも、一旦いったん、奥に入って、五十あまりの品のいいお老女さんおきなさんを、呼び出してきた。

「これは、これは、若奥様のお国の方で、いらっしゃいますか。せつかくのお越しでございますが、実は、ご当主様が、このところ、ご不例で、大学病院へご入院中なので、若奥様も、今朝から、そちらへ、ご看病にお出ましで……」

と、丁重な言葉使いで、不在を告げられると、丑之助の体から、すべての力が、抜け落ちる気持だった。

山上御殿

一

有島家の老女の言葉は、口実ではなかったとみえて、その数日後に、伯爵有島友彰ともあきらの死亡広告が、